第２章　世田谷の風景特性

１．世田谷の風景の成り立ち 2-2

２．世田谷の風景特性..... 2-6

（１）地形
（２）みどり・みず
（３）地域の歴史・文化
（４）住宅地
（５）農
（６）にぎわい
（７）みち
（８）鉄道

世田谷には、武蔵野台地の上に広がる住宅地、豊かに流れる多摩川、多摩川に沿った斜面地の国分寺崖線のみどり、そして世田谷の原風景とも言える農の風景や歴史を感じさせる風景、にぎわいのある風景など多様な風景があります。

第 2 章では、世田谷区が歩んできた時代の流れを踏まえながら、世田谷の風景の成り立ちについて把握するとともに、世田谷の風景を特徴づけている要素を風景特性として整理し、それぞれの内容について示します。また、風景づくり資源図（関連資料（別刷））では、区内の主な風景資源を示します。

１．世田谷の風景の成り立ち

起伏豊かな世田谷の地形

世田谷区の地形は、南西部の多摩川に沿って成城・大蔵・瀬田・野毛に至る国分寺崖線を境に、北東側は台地、南西側は低地に分けられます。武蔵野台地の一部である台地部には、幾筋かの河川によって浸食された、丘や谷の起伏が存在します。この地形が世田谷の風景の基盤となっています。

また区内には、河川沿いを中心に先土器時代の集落跡から中世近世の城館や民家跡などが確認されており、古くから地形状況を踏まえた人々の営みがあったことがわかります。

国分寺崖線の風景

近郊農村から始まる世田谷の街並み（江戸時代～明治末期）

江戸時代の頃になると、江戸市中に向けて野菜を供給する近郊農村として発展してきました。現在でも各所に残されている屋敷林や農地は、世田谷の原風景と言えるものです。

江戸時代から風光明媚な景勝地としても知られていた国分寺崖線では、明治の終わり頃から、実業家・政治家などの別邸が建てられました。現在でもその名残をとどめています。

静嘉堂文庫

鉄道の開通と世田谷の街並みの形成（明治末期～昭和初期）

明治の終わりから昭和初期にかけて、鉄道の建設が進みます。1907年（明治40年）に渋谷～二子玉川間で玉川電車（現田園都市線）が開通し、1915年（大正４年）には京王電車（現京王線）の新宿～調布間が開通しました。大正末期から昭和初期にかけて、世田谷線、小田急線、目蒲線（現目黒線）、東横線、大井町線が相次いで開通し、1933年（昭和８年）の井の頭線の開通で、ほぼ今日の区内の鉄道網ができあがりました。

三軒茶屋交差点の玉川電車
(明治 40 年)

鉄道の開通と呼応するように、住宅地の開発も進められました。1912～1913年（大正１～２年）に開発された新町住宅は、当時の駒沢村深沢と玉川村下野毛にかかる山林・原野を切り開いた民間の分譲住宅地です。また、目蒲線（現目黒線）の開通を機に多くの海軍士官たちが住居を構えた奥沢の「海軍村」をはじめ、当時の雰囲気を今に伝える住宅地の風景が残されています。

深沢の街並み

1923年（大正12年）９月１日の関東大震災は、東京・横浜を中心に大きな被害をもたらしました。世田谷区には震災により罹災した避難民が身を寄せ、そのまま定住した人もおり、人口は急増しました。下町各所から寺院が移転した烏山寺町、牛込（現、新宿区）から移転してきた学校とその分譲住宅地で形成された成城町、下谷（現、台東区）から移転してきた商店からなる太子堂の下の谷商店街などの特徴ある街は、関東大震災を機に形づくられたものです。

昭和初期の近代住宅（成城）

1924年（大正13年）の組合設立準備から1954年（昭和29年）の事業完了まで、30年をかけて行われた玉川全円耕地整理事業は、現在の世田谷区の面積の約４分の１を占める玉川地域（旧玉川村全域）を対象としたものです。昭和初期は、基盤整備の全盛期で都市計画法による土地区画整理事業も数多く着手されました。

烏山寺町

第二次世界大戦後の急激な都市化

第二次世界大戦後、東京への人口集中と急激な市街化が進みました。軍用地の跡地には、昭和女子大学や東京農業大学をはじめ、中学校や高校、病院などの施設が数多く建設されました。また、1964年（昭和39年）に開催された東京オリンピックにあわせて、競技会場となった駒沢公園や馬事公苑やアクセス道路の整備など、多くのオリンピック関連事業による整備が行われました。

駒沢オリンピック公園（開催当時）

また、昭和30年代から40年代にかけて、都営住宅第2団地（下馬アパート）や大蔵団地をはじめ、幾つもの大規模な集合住宅団地が建設されました。

大蔵団地

都市デザインによる風景づくり

昭和50年の区長公選制の復活をきっかけに、世田谷区の特性を活かした街づくりがスタートしました。昭和57年に庁内に都市デザイン室が設置され、区民参加で魅力的な都市空間を生み出すとともに、せたがや百景をはじめとした普及・啓発事業が行われました。

けやき広場

平成11年に風景づくり条例を制定し、平成１９年には都内区市町村初の景観行政団体となり、平成２０年に「風景づくり計画」を施行しました。地域風景資産の選定など、区民・事業者・区との協働による風景づくりに取り組んでいます。

『住宅都市』世田谷

平成23年度の土地利用現況調査によると、区内宅地の74％（区全体面積の49.4％）で住居系の土地利用がなされています。また、用途地域の指定では住居系が９割（第一種低層住居専用地域が５割）の面積を占めています。住居系用途地域の占める面積割合は23区の中で最も高く、世田谷区が住宅都市と言われる理由のひとつです。

戸建て住宅地の風景

また、区内の約４分の１をみどりとみずが占めています。区では更なるみどり豊かな環境に向けて区制100周年を迎える平成44年にみどり率33％を目指しています（『世田谷みどり33』）。このような特徴を踏まえながら、「世田谷区建築物の建築に係る住環境の整備に関する条例」や「みどりの基

本条例」等の制度を運用し、みどり豊かな住宅地の街づくりに取り組んでいます。

集合住宅の風景

２．世田谷の風景特性

（１）地形

武蔵野台地を幾筋かの河川が浸食し形づくられた起伏の豊かな地形は、世田谷の風景の基盤となるものです。それらは国分寺崖線に代表される斜面地や坂道、高台からの眺望、国分寺崖線の稜線への眺めに風景の特性としてあらわれ、また河川と台地からなる起伏の中で形成される住宅地、商店街、公園・緑地にも読みとることができます。

風景をかたちづくる基盤となる地形

世田谷区の地形は、大きく武蔵野台地と多摩川の低地とに区分されます。台地から多摩川に向かって幾筋かの小河川が台地を深く刻み込みながら流れ込むことにより、国分寺崖線や 23 区で唯一の渓谷である等々力渓谷など、起伏に富んだ豊かな風景をつくりだしています。

河川、水路に沿って多くの埋蔵文化財が発見されていることは、当時の土地利用や生活の履歴を知る手がかりであり、また、台地の上で多く区画整理が行われてきたことや、斜面地に残る武蔵野の雑木林の自然風景など、世田谷特有の地形はこれまでの市街地の形成に大きな影響を及ぼしています。このように世田谷固有の地形は、世田谷の風景を形づくる基盤となっている重要な風景特性です。

きたみふれあい広場から見る国分寺崖線

起伏によりつくられる特徴的な見晴らし

地形の起伏によってつくりだされる高低差は、特徴的な眺めをつくりだしています。

国分寺崖線上から富士山への眺望、仙川の崖線上から市街地への見晴らし、市街地からの崖線や台地に残された樹林地への見通しや見渡し、台地から沢に下る坂道がつくる見晴らしは、台地を幾筋もの河川が刻み込んだ世田谷の地形の特徴を感じさせます。

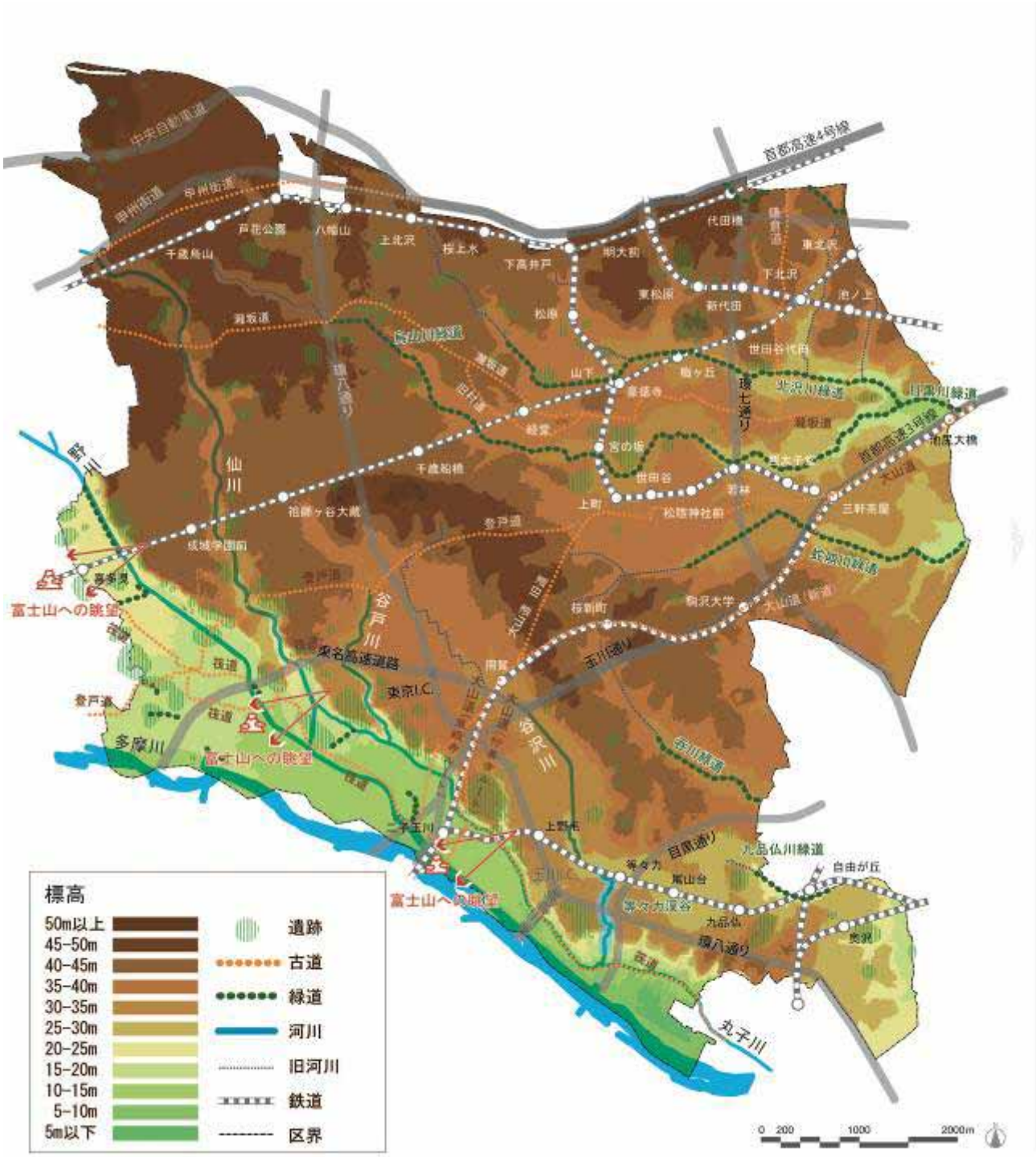
特に国分寺崖線の崖上から多摩川や富士山などへの見晴らしは、段丘状の地形ならではのものであり、崖線の風景を特徴づける重要な要素です。歴史的にも江戸時代中期以降、瀬田の行善寺からの眺望は「玉川八景」として親しまれてきました。現在は、崖下平坦部の市街化も進み、当時の農村、自然風景とは変わってきましたが、世田谷の中では希少な見晴らしのある風景を得ることができます。

上野毛の富士見橋からの眺め

地形を感じさせる坂道

坂道は、起伏の豊かな世田谷の地形を感じさせる重要な要素です。坂道を通して展開する多摩川や市街地の見晴らしは、地形の豊かさを感じることができる特徴的な風景といえます。

地形の豊かさを感じさせる坂道



（2）みどり・みず

国分寺崖線などの連続するみどりをはじめとして、武蔵野台地の面影を残す樹林地、寺社のみどり、大規模な公園や緑地のみどり、住宅地のみどり、宅地の開発に合わせて植えられた並木やシンボルとなる高木、また、豊かな流れを保つ多摩川や野川をはじめ様々な水辺や湧水がつくる風景は、世田谷の風景を形成する重要な要素です。

国分寺崖線を骨格とした連続するみどり

多摩川、野川に沿って国分寺市から大田区にかけて連続する国分寺崖線は、みどりが豊かで湧水等の自然環境に恵まれた、区を代表する風景です。

斜面地にまとまった樹林が連続する風景は、もっとも崖線らしさを特徴づけるもので、豊かな動植物を育む区内の生態系の要ともいえます。

崖線のみどりの連続性を感じさせる重要な要素として、松などの高木で特徴づけられるスカイラインがあげられます。多摩川や野川沿いからは、中遠景に崖線の連続したみどりのスカイラインを見渡すことができる場所が随所にあります。

国分寺崖線のスカイライン

樹林地や公園などのまとまったみどり

武蔵野台地の雑木林の面影を残す樹林地、寺社のみどり、大規模な公園や緑地には、比較的まとまったみどりが残されています。平成２３年度世田谷区土地利用現況調査では、区全体のみどり率は 24.6%で、そのうちの７割が樹木や樹林に覆われた樹木地です。量感のあるまとまったみどりは、潤いのある風景を形成する核となっています。

上野毛自然公園

街なかのみどりや並木

街なかには、緑道や並木、シンボルとなる高木、敷地内を彩る花木など、様々なみどりの風景があります。

かつての河川を暗渠化して整備した緑道は、その線形は残しつつ、今は憩いと安らぎを与える散歩道です。

住宅地の開発とあわせて植えられた桜やイチョウの並木は年を重ねるにつれて街の風景に溶け込み、風格をもたらしています。区の樹でもあるケヤキの高木は、かつて近郊農村であった世田谷の風景を語る上で欠かせない存在です。

深沢の桜並木

また、敷地内にある手入れの行き届いた庭木や彩り豊かに飾られた花々の様子は、道行く人を楽しませるとともに、街の魅力を高めることに貢献しています。

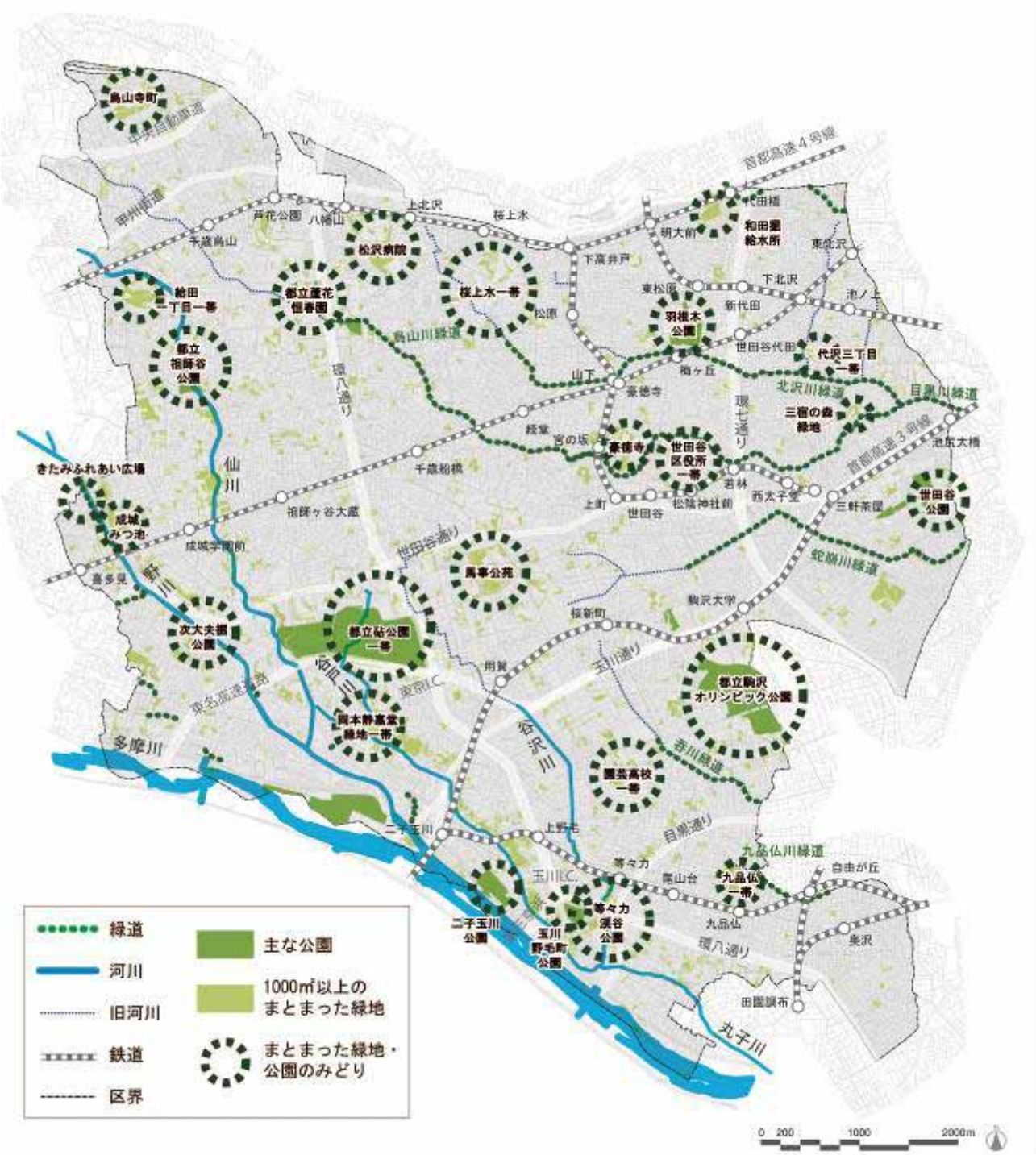
潤いのある河川や水辺

区内には多摩川をはじめ、野川や丸子川など、複数の河川が流れています。中でも多摩川は東京を代表する河川であり、豊かに広がるみどりとみずの風景は、人々に憩いと安らぎを与えています。

また、野川、丸子川、仙川などの水辺は、周辺のみどりと一体となり、潤いのある風景となっています。

国分寺崖線沿いには 90 カ所程の湧水地点が確認されています。多くの水生生物や植物を育む多様な生態系は、豊かな自然を感じられる風景です。

多摩川の風景



（３）地域の歴史・文化

地域のシンボルとして重要な意味をもつ古墳や寺社、世田谷ゆかりの文人を偲ぶ歴史的庭園、農の風景や近代住宅地の面影を感じさせる歴史的な建築物、身近なところに点在する碑、ボロ市などの催し、地域の新たな風景づくりに資する建築物・建造物などは、地域の歴史や文化を伝える重要な要素です。

地域の歴史を物語る歴史的資産

区内には、数多くの遺跡があります。先土器時代、縄文時代、古墳時代の集落跡、高塚古墳や横穴古墳、中世近世の城趾や民家跡などその種類も豊富です。また、国や都、区が指定・登録する建造物や史跡などの文化財をはじめ、古くからある寺社、近代住宅地の面影を感じさせる歴史的な建築物や石碑なども、数多く存在します。

旧安藤家住宅（次大夫堀公園内）

また、関東大震災の後多くの寺院が移転し、今もなお特徴的な街並みが形成されている烏山寺町のように、複数の建物等が集積することによって特徴的な風景が作り出されている「界わい」も幾つか見られます。

これらの点や面としての歴史的資産は、地域の歴史を物語るとともに、地域の風景を継承し、地域の魅力や個性を表すものとして貴重な存在です。

昔からの街道・古道

区内には、五街道のひとつである甲州街道や、東海道の裏街道として重視されていた大山道、瀧坂道、登戸道（津久井街道）、鎌倉道などの街道や古道が存在します。

街道や古道沿いには、今でも往時の面影を残す風景が見られる場所も残されており、地域の歴史が偲ばれる特徴ある風景をつくる要素です。

古道の風景

地域の魅力を高める伝統的な行事・催し

区内の各地では、地域の住民等が中心となり実施されてきた伝統的な行事や催しがあります。中でも、１月と 12 月の 15・16 日の年２回、代官屋敷を中心に通称ボロ市通りで行われる「ボロ市」は、430 年以上の伝統を持ち、冬の風物詩として１日に約 20 万人もの人出でにぎわっており、ボロ市通りでは街並みに配慮した建物もつくられつつあります。

ボロ市の風景

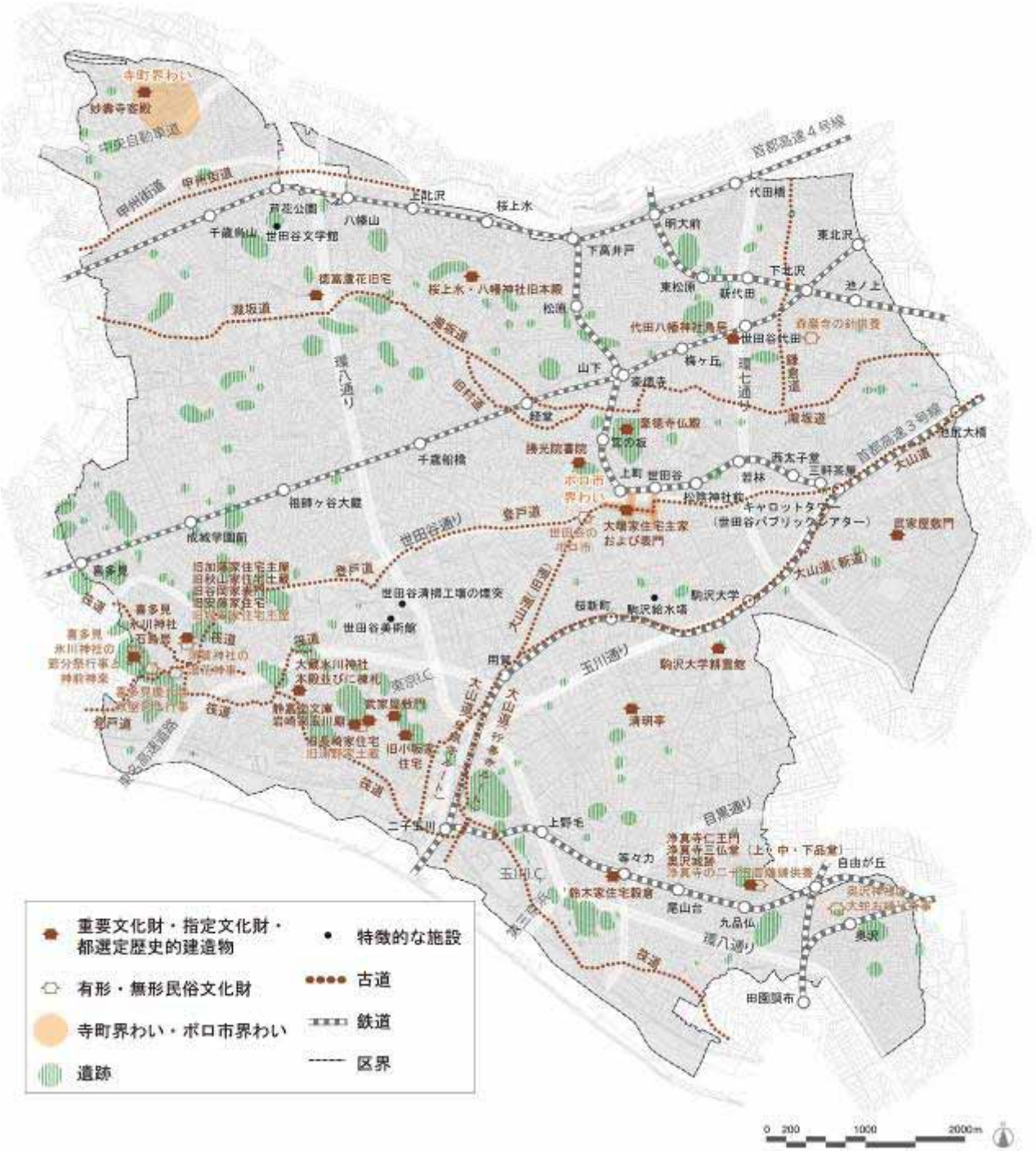
このような地域が培ってきた伝統的な行事や催しは、地域の歴史や文化を体感でき、季節の風物詩として風景を演出する要素のひとつです。

地域の新たな風景づくりに資する建築物・建造物

近年、新たに整備された建築物や建造物においても、地域の特性を踏まえた優れたデザインは、地域のシンボルとなり、新たな風景を先導するものとして大きな役割を果たします。

また、区民公募のコンペによりデザインされた世田谷清掃工場の煙突や、区民参加で整備された公園や緑道など、区民のアイデアが地域の新たな風景に活かされることで、区民の風景に対する愛着を高めることにつながります。

世田谷美術館（背後に清掃工場の煙突）



（４）住宅地

大正から昭和初期における分譲住宅地や、玉川全円耕地整理事業をはじめとした宅地開発、戦後の都市化や人口集中に伴う団地やマンション開発など、区内の住宅地は、開発された時期や方法、そこに住む住民らの生活の営みにより様々な表情があります。

時代の積み重ねから築かれてきた特徴ある住宅地

江戸の近郊農村であった世田谷は、明治維新以降、関東大震災、第二次世界大戦、高度経済成長期と、その時々の影響を受けながら、郊外住宅地から住宅都市へと大きく変化していきました。その時々の特徴的な風景の積み重ねが、現在の世田谷の風景を形づくっています。

＜国分寺崖線沿いの別邸建築＞

国分寺崖線は、江戸時代から風光明媚な景勝地として知られており、明治の終わり頃になると岡本から上野毛にかけて、実業家・政治家等の別邸が建てられるようになりました。今もなおこの周辺では崖線のみどりと共存した良好な住宅地の風景がみられます。

国分寺崖線沿いの邸宅　旧小坂邸

＜鉄道の開通を契機につくられた特徴的な住宅地＞

大正から昭和初期にかけて、鉄道の開通を契機に特徴的な住宅地がつくられました。

現在の桜新町は、玉川電気鉄道の沿線開発として、大規模な計画的な住宅地開発が行われたことが始まりです。また、目蒲線（現目黒線）の開通により多くの海軍士官たちが住居を構えた奥沢の「海軍村」、桜並木を中心に特徴的な街路が印象的な上北沢駅前の住宅地、成城学園の学園町として開発された住宅地など、幾つもの住宅地が形成され、今も当時の風景を知ることのできる街並みが残されています。

また、現在の世田谷区の面積の約４分の１を占める玉川地域（旧玉川村全域）で行われた玉川全円耕地整理事業によって整備された都市基盤は、現在のゆとりある整然とした街並みの基礎となっています。

成城の住宅地

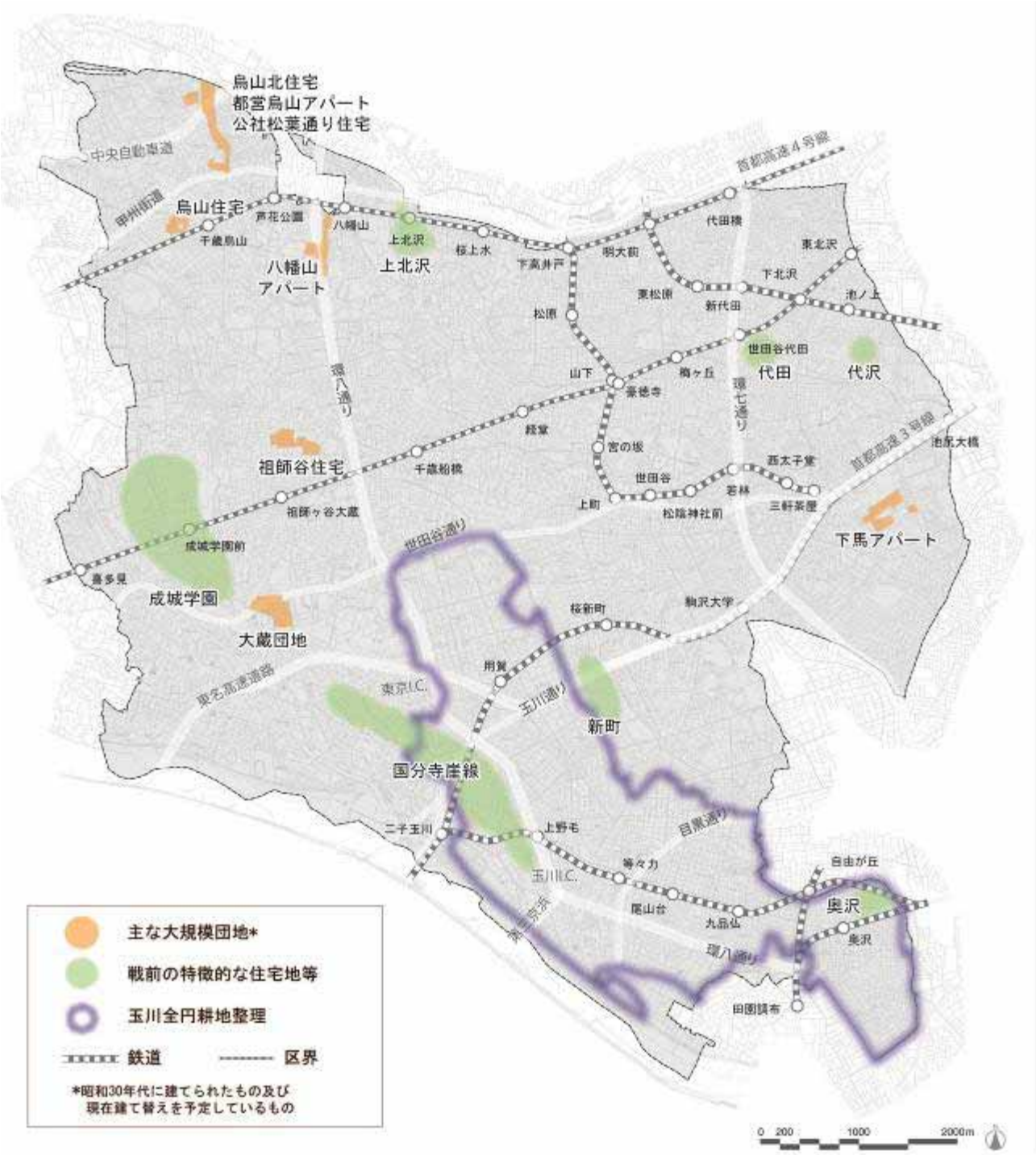
＜戦後の急激な住宅市街地化＞

戦後の世田谷は東京への人口集中の影響を受けて急激な市街化が進みました。昭和 30 年代から 40 年代にかけて、都営住宅第２団地（下馬アパート）や大蔵団地をはじめ、幾つもの大規模な団地が建設されました。企業の社宅なども多くあります。

一方で、道路などの都市基盤が整備されない中で市街化が進んだことにより、いわゆる密集市街地も形成されました。

世田谷区は、住居系の用途地域指定が約９割を占める『住宅都市』です。近年は戸建て住宅に加えて民間のマンションが多く建設されることにより、街並みが更に変化しています。また、古い団地や社宅の建て替え、転用も行われるようになってきています。

集合住宅の風景



（5）農

農地や屋敷林の風景は、かつて近郊農村であった世田谷の原風景といえるものです。農地は現代都市において原風景の営みが感じられる貴重な風景であり、屋敷林は地域の目印になるみどりにもなっています。

世田谷の原風景としての農の風景

江戸時代の頃から江戸市中向けに野菜などを供給する農村として発展してきた世田谷の農業は、明治期以降、東京の急激な市街化や人口の増加により、より多くの野菜を生産・出荷するようになりました。

しかし、戦後の高度経済成長とともに都市化が進み、多くの農地は宅地化されました。各所に残された農家の屋敷林や農地の風景は、かつての近郊農村であった世田谷を思いおこさせる原風景といえるものです。

区では、生産緑地の指定に加え必要な農地の保全を図るため、世田谷区農地保全方針を策定し、「農地保全重点地区」を計７か所指定（平成 26 年度時点）しています。また、喜多見四・五丁目は、東京都の「農の風景育成地区」に指定されています。

農地と社寺林の風景

農地の風景

農に親しむ風景

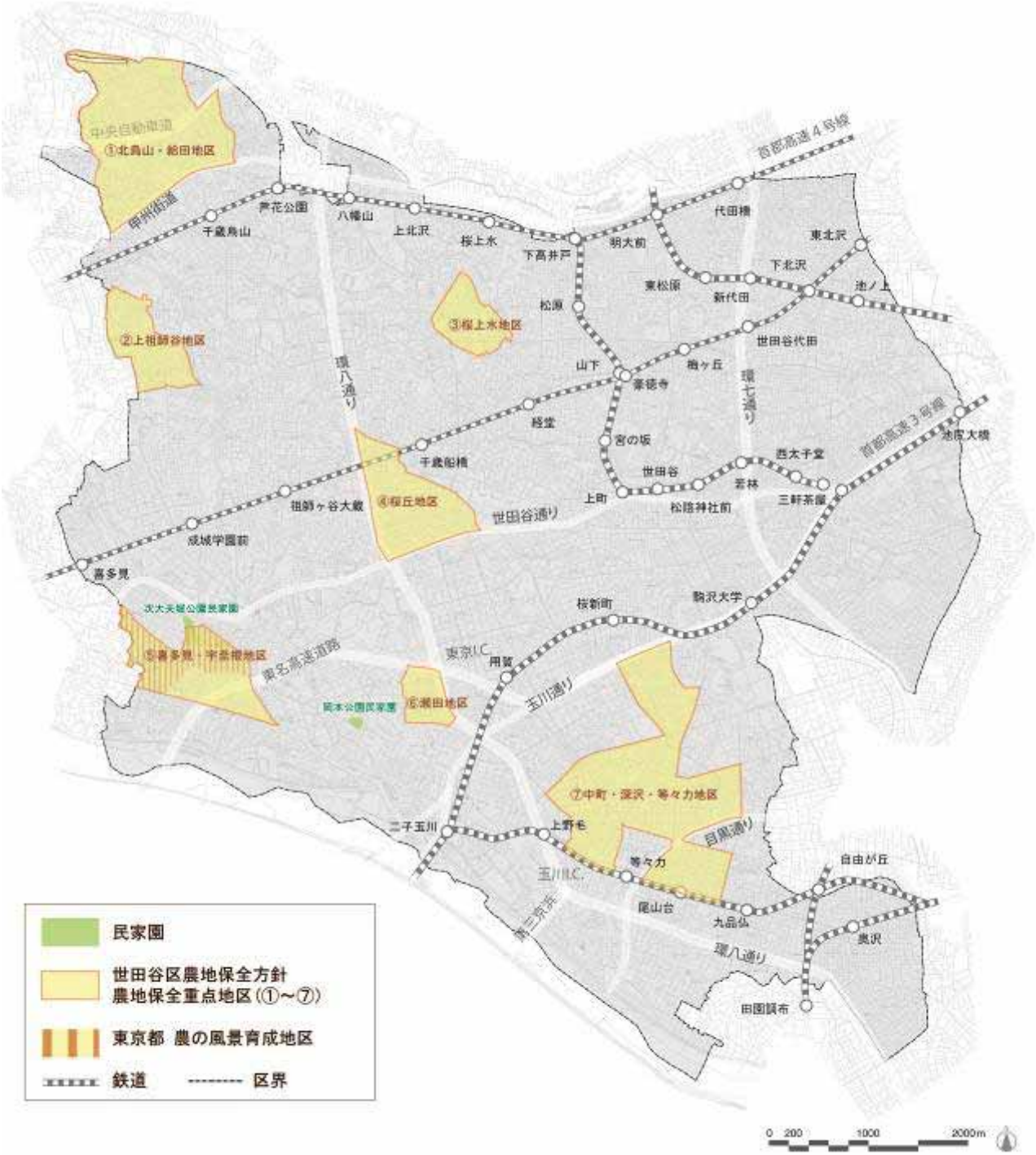
都市における農地は、農作物を生産するだけでなく、潤いや安らぎが感じられる風景の創出やみどりとみずの環境保全、災害時の防災拠点、レクリエーションのひとつとしての農に親しむことなど、多面的で公益的な機能を有する空間として捉えられています。

例えば区内には区民が土に触れ、野菜づくりを楽しむ場として農家が開設する「農業体験農園」や、区画貸しの「区民農園」などがあります。そこでは、週末家族で農に親しむ姿が見られるなど、都市の農ならではの風景を見ることができます。また農地に隣接して農産物の直売所が点在する様子も世田谷の特徴的な風景といえます。

次大夫堀公園民家園では、名主屋敷を復元し、公園内の次大夫堀や水田とあわせて、江戸時代後期から明治時代初期にかけての農村風景が再現されています。

次大夫堀公園での田植えの風景

次大夫堀公園内に再現された農村風景


①北烏山・給田地区
②上祖師谷地区
③桜上水地区
④桜丘地区
⑤喜多見・宇奈根地区
⑥瀬田地区
⑦中町・深沢・等々力地区
中央自動車道
甲州街道
首都高速4号線
首都高速3号線
環八通り
環七通り
世田谷通り
玉川通り
目黒通り
東名高速道路
第三京浜
環八通り
芦花公園
八幡山
上北沢
桜上水
下高井戸
明大前
代田橋
東北沢
下北沢
新代田
池ノ上
東松原
松原
世田谷代田
山下
豪徳寺
梅ヶ丘
経堂
宮の坂
千歳船橋
祖師ヶ谷大蔵
成城学園前
喜多見
世田谷
上町
松陰神社前
若林
西太子堂
三軒茶屋
池尻大橋
駒沢大学
桜新町
東京IC
用賀
二子玉川
上野毛
等々力
尾山台
九品仏
自由が丘
奥沢
田園調布
玉川IC
民家園
世田谷区農地保全方針
農地保全重点地区（①～⑦）
東京都 農の風景育成地区
鉄道
区界
0 200 1000 2000m

（6）にぎわい

独自の文化や情報を発信する三軒茶屋、下北沢、二子玉川や、駅前商店街などには、商業機能が集積し、多くの人が訪れ活力に満ちています。こうしたにぎわいの風景は、街の顔や拠点として地域を魅力的にし、世田谷の個性を生み出す重要な要素です。

活気あふれる広域生活・文化拠点

三軒茶屋、下北沢、二子玉川は、都市整備方針において区を超えた広域的な交流の場となる「広域生活・文化拠点」として位置づけられています。ここでは、独自の文化やファッションなどを発信する魅力と活気にあふれる街が形成されているとともに、複合商業施設や文化施設などがにぎわいのある風景をつくり出し、区外からも多くの人が訪れています。

二子玉川の風景

生活感が溢れ、個性的な商店街

区内には、駅周辺を中心に多くの商店街があります。日常生活に密着したサービス等を提供している商店街には、さまざまな店舗等が建ち並び、生活感が溢れにぎわいのある街並みを形成しています。

また、祖師ヶ谷大蔵駅周辺のウルトラマン商店街や桜新町駅周辺のサザエさん通りなど、地域資源を活かしてにぎわいづくりに取り組んでいる個性豊かな商店街も多くあり、特徴ある風景を形成しています。

ウルトラマンをデザインに取り入れた商店街路灯

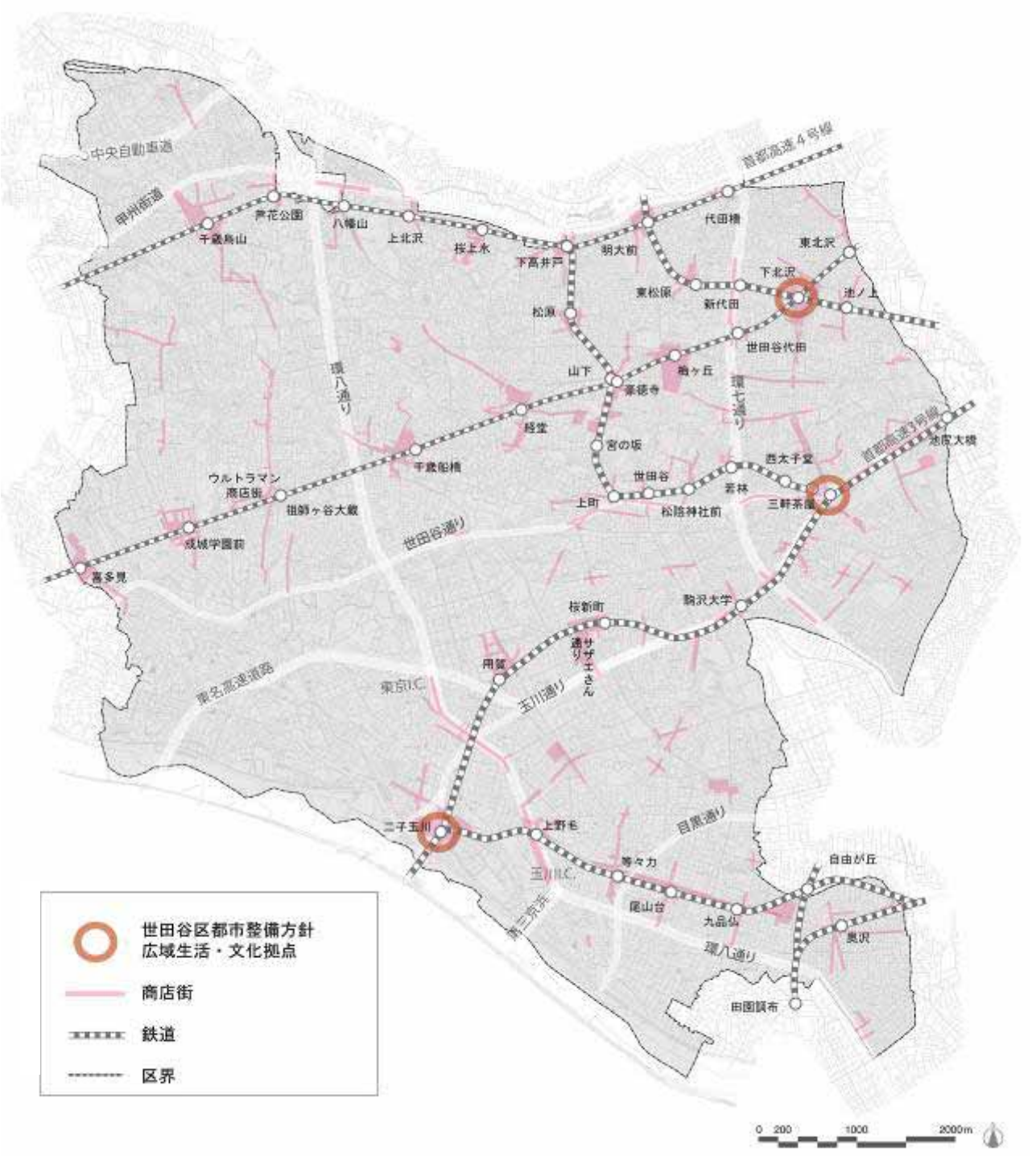
イベントがつくるにぎわいの風景

昭和 53 年の第１回開催以来、世田谷の夏の風物詩として広く区民に定着している「せたがやふるさと区民まつり」をはじめ、夏に多摩川の河川敷で行われる「世田谷区たまがわ花火大会」、多くのパフォーマーが三軒茶屋を舞台に大道芸を披露する「三茶 de 大道芸」、羽根木公園で行われる「せたがや梅まつり」、桜新町、成城、上北沢など各地で行われる桜まつりなど、毎年恒例となった大小さまざまなイベントが、区内の各地で催されています。

三茶 de 大道芸の開催風景

多くの人でにぎわうイベントの風景は、地域に欠かすことのできない季節の風物詩として、認識されています。

せたがや梅まつり



（7）みち

“みち”には環状七号・八号線などの幹線道路や地区幹線道路、主要生活道路、地先道路など機能ごとに様々な道路があり、沿道の建築物などとあわせて多様な風景をつくっています。また、緑道などは歩いて心地よい風景をつくっています。これらの“みち”は、生活の中で多くの人が行き交い目に触れる風景であり、地域の印象を左右する重要な要素です。

街の骨格となる幹線道路

環状七号線や環状八号線、玉川通りや甲州街道などの幹線道路は、広い幅員を持ち大きな街路樹が育っています。多くの人が日々利用し目にする幹線道路は、街の骨格です。

また沿道には多くの店舗や事務所など中高層の建物が建ち並び、常に多くの自動車が行き交う、幹線道路ならではの風景がみられます。

幹線道路の風景

日常の営みとともにある生活道路の風景

主要生活道路や地先道路などは、通勤や通学、買い物、散歩など、日々の生活の中で利用する身近な道路です。こうした道路を舞台として生活感のある風景が見られるとともに、日常の一部として地域の人々の生活に根づいています。

主要生活道路の風景

憩いの空間として親しまれる緑道の風景

区内には、烏山川緑道や北沢川緑道など中小河川の上部を利用し、みどり豊かな緑道として整備されているところが幾つもあります。

緑道は散歩道や憩いの空間であることはもちろんのこと、歩行者の安全な歩行空間や緊急の避難通路にもなっています。桜並木が名所となっているところもあり、都市の中で季節を感じることができる貴重な空間です。遊具や健康器具などが設置されていたり、烏山川緑道や北沢川緑道では区民参加により整備が行われ、潤いのある安全で身近な空間として、多くの区民に親しまれています。

北沢川緑道

特徴のあるみち

緑道に加え、区内には他にも様々な特徴を持った“みち”があり、地域の風景を印象づける主要な要素となっています。

例えば、用賀駅北口から砧公園、世田谷美術館を結ぶ「用賀プロムナード」は、瓦の舗装と玉砂利の水路によってデザインされ、「いらか道」の愛称で散歩や憩いの空間として親しまれています。

また馬事公苑のけやき広場や弦巻プロムナードの整備など、特徴のあるデザインによって整備された場所では、印象的な“みち”の風景をつくりだしています。

用賀プロムナード

（8）鉄　道

区内の鉄道整備は、1907（明治 40）年に営業開始した玉川電車に始まり、現在では京王線、小田急線、京王井の頭線、東急世田谷線、東急田園都市線、東急大井町線、東急目黒線、東急東横線の各鉄道路線が敷設されています。鉄道沿線や駅周辺の風景は区民のみならず鉄道利用者を含む多くの人が目にし、日々の生活に馴染み深い風景です。

整備が進む小田急線・京王線

小田急線と京王線では連続立体交差事業により、道路と鉄道の立体化が進められています。小田急線では、東北沢駅から世田谷代田駅間が地下化され、各駅前広場の整備や鉄道地下化に伴い生じる線路跡地の利用の検討が進められています。また、京王線についても事業に伴い、側道や駅前広場などが整備されます。

これらの整備により、人の流れや風景が大きく変わることが予想されます。

高架化した千歳船橋駅の風景

鉄道駅から広がるにぎわいの風景

鉄道駅は駅を利用する人々でにぎわいます。駅前広場には多くの人が集まり、街の顔となっています。

また駅周辺には商店街も多く、そこに集積した店舗や事務所などを利用する人々によるにぎわいが広がっています。

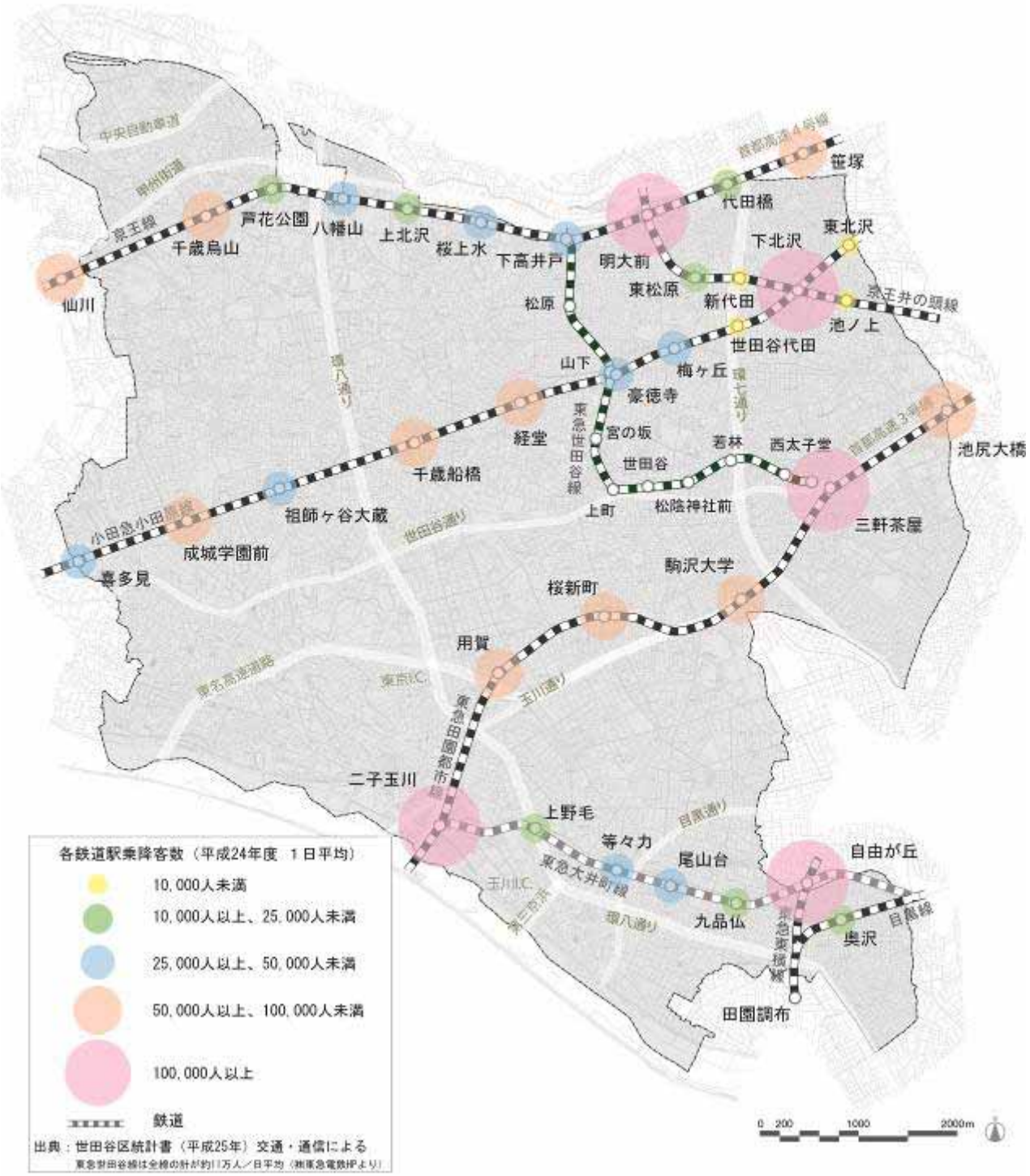
地域で生活する人々の暮らしの中心でもある駅周辺では、親しみのあるにぎわいの風景を見ることができます。

千歳烏山駅周辺の風景

生活に溶け込んだ特徴的な世田谷線の風景

下高井戸駅と三軒茶屋駅の間を結び運行されている東急世田谷線は、２両編成の色とりどりのコンパクトな車両が住宅地の中をゆったりとした速度で走ります。沿線には季節毎に楽しめる草木や花々が植えられ、利用者の目も楽しませてくれる、世田谷の特徴的な風景です。

世田谷線が走る風景


中央自動車道
甲州街道
京王線
仙川
千歳烏山
芦花公園
八幡山
上北沢
桜上水
下高井戸
明大前
代田橋
笹塚
東北沢
下北沢
東松原
新代田
京王井の頭線
池ノ上
世田谷代田
松原
山下
梅ヶ丘
豪徳寺
環八通り
環七通り
東急世田谷線
宮の坂
経堂
若林
西太子堂
池尻大橋
世田谷
千歳船橋
上町
松陰神社前
三軒茶屋
小田急小田原線
祖師ヶ谷大蔵
世田谷通り
成城学園前
喜多見
駒沢大学
桜新町
用賀
東名高速道路
東京IC
玉川通り
東急田園都市線
二子玉川
上野毛
目黒通り
等々力
尾山台
自由が丘
東急大井町線
玉川IC
九品仏
奥沢
目黒線
田園調布
各鉄道駅乗降客数（平成24年度　1日平均）
10,000人未満
10,000人以上、25,000人未満
25,000人以上、50,000人未満
50,000人以上、100,000人未満
100,000人以上
鉄道
出典：世田谷区統計書（平成25年）交通・通信による
東急世田谷線は全線の計が約1万人／日平均（東急電鉄HPより）
0 200 1000 2000m